

分類することの意味と疑問

平澤 洋一

1 分類することの意味

言語事項の授業でも、情報機器の支援を受けることによって、言語事項の科学的な分析結果の提示が可能となることが多い。一例を引こう。『現代の国語3』（三省堂）の折り込み表に国語の品詞分類の図（図1）が載っている。これは橋本文法に山田文法を加えて作られた文法の代表的な産物といってよい。学校文法を習う時に必ず出てくる図であり、典型的なシソーラス分類の例でもある。そして、一見したところでは、私たちの言語感覚にかなり合った分類図であるような印象が強いものの、実際にはどうなであろうか。

図1では〔自立語〕〔主語になる〕〔活用がある〕といった弁別の特徴が表示され、その弁別の特徴を基準にして日本語の品詞が類分けされている。

第1群：〔自立語〕〔活用がある〕→動詞，形容詞，形容動詞

〔自立語〕〔活用がない〕→名詞，副詞，連体詞，接続詞，感動詞

第2群：〔付属語〕〔活用がある〕→助動詞

〔付属語〕〔活用がない〕→助詞

しかし、〔主語になる〕のは名詞だけにしても、主語にならないのは図1の小クラスターに属する「副詞」「連体詞」「接続詞」「感動詞」にとどまるものではなく、「動詞」「形容詞」「形容動詞」も、「助詞」「助動詞」もまた主語にならない品詞である。

このような言語実態は、図1の分類図にはうまく反映されてはいない。ということは、日本語の品詞分類図は、もっと別の体系をしているのではないかとすることを予想させる（各品詞が図1に示されたような弁別の特徴以外の文法特徴をもつとする文法論があるが、ここではそのことは問題にしないことにする）。

2 品詞の分類を例に

日本語の言語実態が図1のようであるのか否かを検証するために、図1の各品詞と弁別の特徴との関係を「1，0」でできるだけ正確に反映させた表1を作成し、これをクラスター分析（ユ

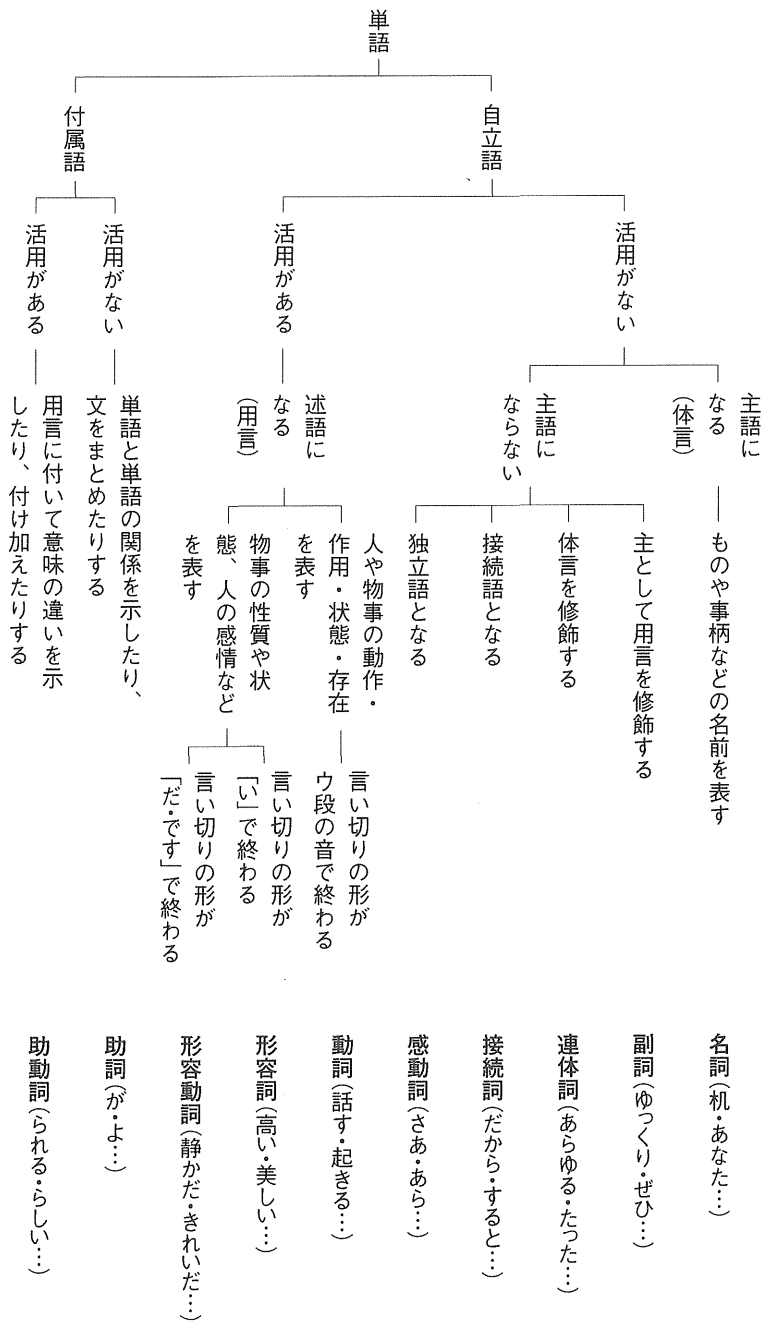


図1 学校文法による品詞分類1

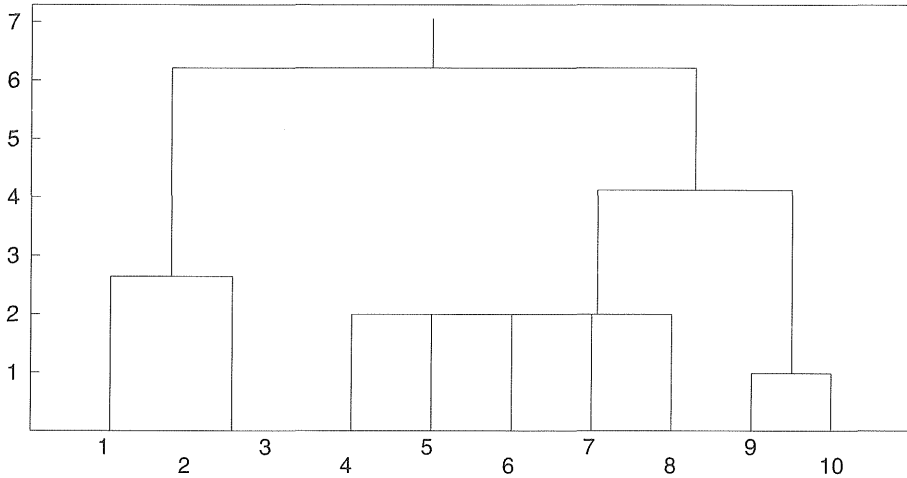


図2 学校文法による品詞分類2

ークリッド平方距離，ワード法)してデンドログラムで表示すると，図2を得る。

図2では，品詞群は二つのクラスターに分けられ，クラスター2は[自立語]の品詞と[付属語]の品詞に小分類されているが，「4名詞」「5副詞」「6連体詞」「7接続詞」「8感動詞」の5品詞が同じ非類似度で横一列に並んでおり，分類がすっきりしない。

クラスター1：1動詞，2形容詞，3形容動詞

クラスター2：4名詞，5副詞，6連体詞，7接続詞，8感動詞

9助動詞，10助詞

図2は，図1より言語実態から遠く感じられる。また，図1の動詞の[言切り形がウ]，形容詞の[言切り形がイ]という弁別の特徴を重視して表2を作成してクラスター分析すると，非類似度の計算値が非常に大きなものになり，「品詞間の非類似度行列」が作れなくなるので，表2の方法は適切とはいえない。

図2が図1より言語実態から遠く感じられる原因は，クラスター分析の方法にあるのではなく，表1を「1，0」で作成したことにあると考え，表1を「2，1，0」(=ある品詞に対して，ある弁別的特長が[+]の場合に2，[±]のそれを1，[-]を0と表示する)で表記させたのが表3である。この表3のデータをクラスター分析してデンドログラムで表示したのが図3である。

図3では，

クラスター1：1動詞，2形容詞，3形容動詞

9助動詞，10助詞

クラスター2：4名詞，6連体詞

5副詞，7接続詞，8感動詞

のようなクラスターになり、クラスター1と2を分割する有効な弁別の特徴を有しない分類図になってしまい、これも我々の直観的な分類には合わない。

次には、表2を「2, 1, 0」で表記しなおした表4を作成し、それをクラスター分析したのが図4である。図4では、「9助動詞」「10助詞」の位置が変わったくらいであり、クラスター1に「1動詞」「2形容詞」「3形容動詞」「9助動詞」「10助詞」が属している。また、クラスター2では「5副詞」「7接続詞」「8感動詞」が小クラスターをなしており、この3品詞が横に並ぶことの積極的な弁別の意味特徴が表4には見出しにくい。従って、表4も完全とはとてもいえない。

表4 修正した弁別の特徴2

品詞	自立語	活用する	言切り形がウ	言切り形がイ	体言修飾	用言修飾	主語になる	独立語	接続語
1 動詞	2	2	2	0	1	0	0	0	0
2 形容詞	2	2	0	2	1	1	0	0	0
3 形容動	2	2	0	0	1	1	0	0	0
4 名詞	2	0	0	0	1	0	2	0	0
5 副詞	2	0	0	0	0	2	0	0	0
6 連体詞	2	0	0	0	2	0	0	0	0
7 接続詞	2	0	0	0	0	0	0	0	2
8 感動詞	2	0	0	0	0	0	0	2	0
9 助動詞	0	2	1	1	0	0	0	0	0
10 助詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表5 修正した弁別の特徴3

品詞	自立語	活用する	述語になる	動作等表現	性質等表現	体言修飾	用言修飾	主語になる	独立語	接続語
1 動詞	2	2	2	2	0	1	0	0	0	0
2 形容詞	2	2	2	0	2	1	1	0	0	0
3 形容動	2	2	2	0	2	1	1	0	0	0
4 名詞	2	0	1	0	0	1	0	2	0	0
5 副詞	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0
6 連体詞	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0
7 接続詞	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
8 感動詞	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0
9 助動詞	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0
10 助詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

3 弁別の特徴の修正

となると、より適切な分類を求めるには、表4からさらに進めて、少しでも言語実態に近くなるような弁別の特徴を新たに盛り込んだ表を作るしか方法がないと考えられる。

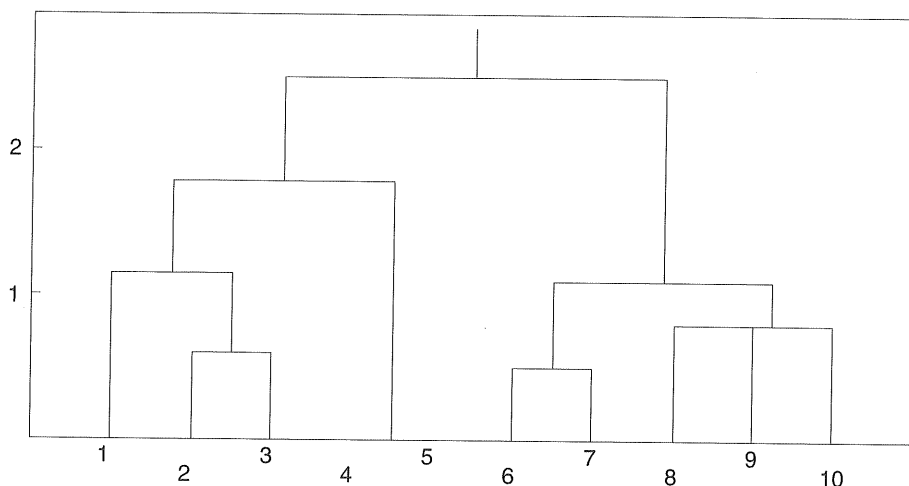


図3 修正した品詞分類1

改善を加えたのが表5である。図3や図4のクラスター1から「1動詞」「2形容詞」「3形容動詞」を独立させ、「9助動詞」「10助詞」をクラスター2に属させるような表ができれば、少しは改善されたものになることが予想される。この問題に関与してくるのが「述語になる」という弁別的特徴である。図5では、弁別的特徴「述語になる」「自立語」によって「1動詞」「2形容詞」「3形容動詞」がクラスター1をなし、「7接続詞」「8感動詞」「9助動詞」「10助詞」が「修飾語にならない」ということで小クラスターをなすことになる。クラスター2はやや不自然な感じが残るものの、かなり言語実感には近づいたように思われる。

同じ表5をもとに主因子分析法で因子得点を求め、座標に表示したのが図6である。「1動詞」「2形容詞」「3形容動詞」、あるいは「4名詞」「7接続詞」「8感動詞」が比較的近くに位置し

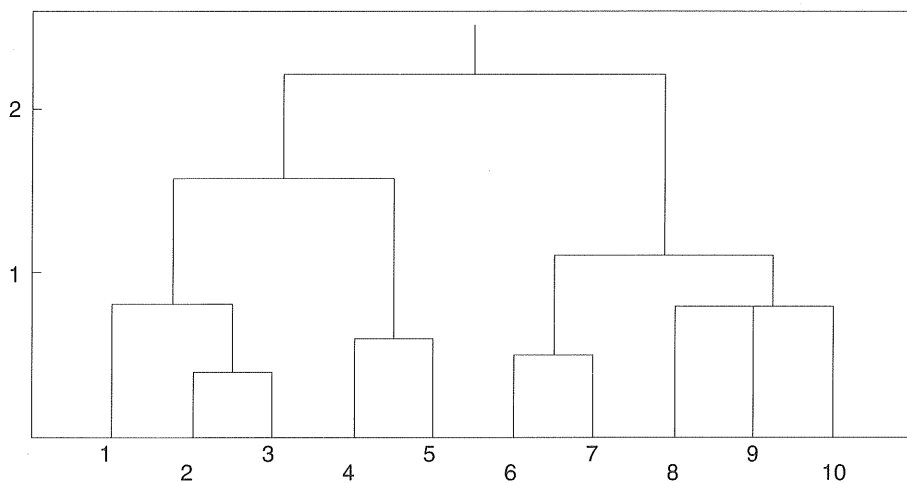


図4 修正した品詞分類2

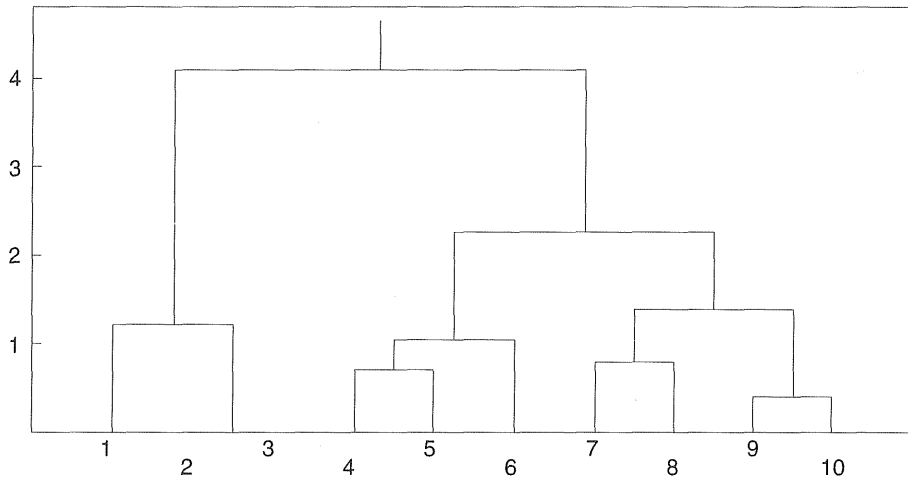


図5 修正した品詞分類3

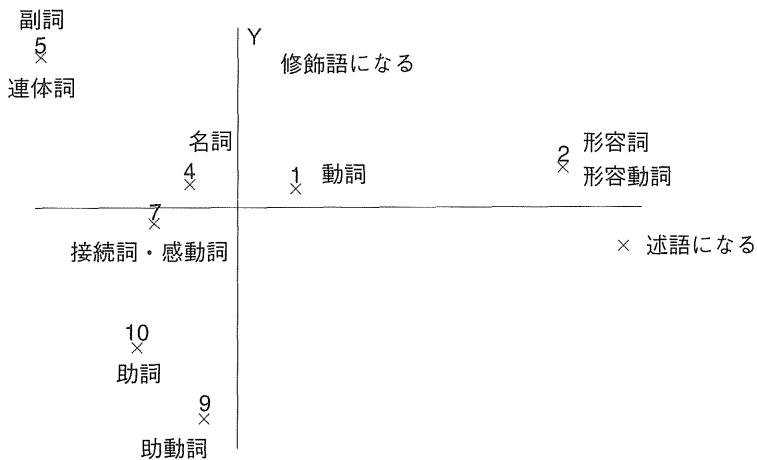


図6 因子得点散布図

ていることが分かる。これらが共通のないしは近似する文法的意味をもった品詞だからである。

なお、本稿の表3～5では、「皇居前広場」「大会前夜」のようなケースの修飾機能をも想定して「4名詞」にも「±修飾語になる」つまり弁別力「1」があるとして処理したが、当該事例をすべて複合名詞として扱えば表6になり、次のような品詞分類となる。また、表6をクラスター分析したデンドログラムは、図7ようになる。

クラスター1：[述語になる][自立語]→1動詞，2形容詞，3形容動詞

クラスター2：[修飾語になる][自立語]→5副詞，6連体詞

[修飾語にならない][自立語]→4名詞，7接続詞，8感動詞

[修飾語にならない][附属語]→9助動詞，10助詞

表 6 修正した弁別の特徴 4

品 詞	自立語	活用 する	述語に なる	動作等 表現	性質等 表現	体言 修飾	用言 修飾	主語に なる	独立語	接続語
1 動 詞	2	2	2	2	0	1	0	0	0	0
2 形容詞	2	2	2	0	2	1	1	0	0	0
3 形容動	2	2	2	0	2	1	1	0	0	0
4 名 詞	2	0	1	0	0	0	0	2	0	0
5 副 詞	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0
6 連体詞	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0
7 接続詞	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
8 感動詞	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0
9 助動詞	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0
10 助 詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

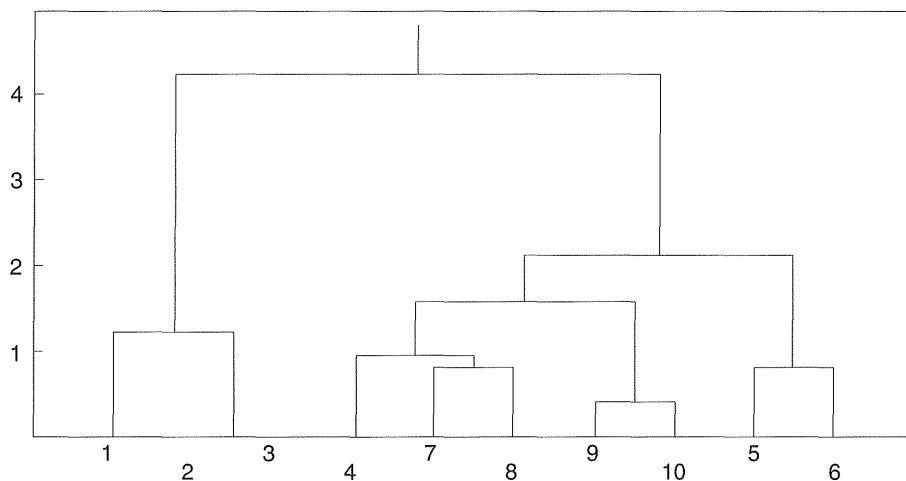


図 7 修正した品詞分類 4

本稿では、学校文法での品詞分類を例に、分類することの意味と疑問を考察した。できるかぎりの工夫を加え、情報機器の支援を求めることによって、「ものを分類すること」「見えない言語事実を体系化すること」の意義と手法、言語を科学的に分類・分析することの意味づけを明示化することができれば、文法理論の開発も少しは容易になる。ただし、言語実態は複雑であり、今後の課題は多い。

参考文献

- 1 中学校国語科用『現代の国語3』三省堂 2002.2.25
- 2 『日本語学』21巻12号, 明治書院 2002.10